

多賀城市文化財調査報告書 第29集

山王遺跡 ほか

—発掘調査報告書—

平成4年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序 文

多賀城周辺の発掘調査は当市教育委員会により昭和54年の館前遺跡から本格的に開始され、本年で13年目をむかえました。この間、平成元年度より山王遺跡八幡地区において仙塩道路建設に伴う発掘調査が宮城県教育委員会と本市埋蔵文化財調査センターの担当で始まり、これまでの点の調査から面の調査へと移行し、多大なる成果を収めつつあります。

このような状況の中で、平成2年に本センターが実施した山王遺跡第9次調査では、「国守の館」と考えられる遺構が発見され、全国でも初めてのものとして注目を集めました。そこで、本市では当地区的重要性を鑑み、文化庁、宮城県教育委員会の助言を得て、現在国指定史跡の働き掛けを行っています。このため、平成2年度より「国守の館」の範囲を明らかにするための遺構確認調査を実施してまいりました。本書は平成2年～3年までの調査結果をまとめたものであり、所期の目的に添うような成果が得られました。

最後に、この調査についてご指導いただきました文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、地元協力者各位に対し深く感謝の意を表すものであります。

平成4年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例　　言

1. 本書は平成2年度～平成3年度に国庫補助事業として実施した「山王遺跡ほか発掘調査」の成果をまとめたものである。
2. 本書には西沢遺跡第1次、山王遺跡第11次・15次・16次の4件を収録し、このうち山王遺跡の3件については、「山王遺跡第9次調査関連遺構確認調査」として実施した。
3. 山王遺跡第16次調査区の位置する一帯は、これまで山地田館跡として登録していたが、山地田という旧字名が他の地点にあることや、今回の調査で古代の遺構が中心に検出されていることより、山地田館跡という名称は抹消し、山王遺跡の中に包括するものとして扱った。
4. 本書の執筆は、石川俊英・相沢清利が分担し、本文目次に示した。また、編集は両名で行った。
5. 本書中における各遺構の略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡、SE：井戸跡、SD：溝跡、SK：土塁、SX：その他
6. 本書挿図中の水系レベルは、標高値を示している。
7. 調査区の実測基準線は、「平面直角座標系X」を使用し、方位の標示は座標北を用いた。
8. 本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原1976）を使用した。
9. 発掘調査および、報告書作成に際して、桑原滋郎、白鳥良一、後藤秀一、菅原弘樹、高橋英一（宮城県教育庁文化財保護課）の諸氏、および当センター職員に御教示、御協力いただいた。
10. 本書の作成にあたっては、大山真由美、福原弥子、佐藤祐子、柏倉霧代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子、平山節子の協力を得た。
11. 調査・整理に関する諸記録および出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

調　　査　　体　　制

1. 調査主体者： 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
2. 調査担当者： 多賀城市埋蔵文化財調査センター
所長 斎藤 一司 主査 赤坂みゑ子
研究員 渥口 卓 石川 俊英 千葉 孝弥
・ 石本 敏 相沢 清利

調査要項

（西沢遺跡第1次調査）

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市市川字伊保石19, 23, 28-1, 29-1, 31-1, 32
2. 調査期間：平成2年10月22日～平成3年1月16日
3. 調査面積：1,278m²
4. 担当職員：滝口 卓 相沢 清利
5. 調査協力者：佐藤 忠、後藤 淳二郎、鈴木 博、佐藤丑之助、小幡あさ子、佐藤 玉治

（山王遺跡第11次調査）

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字中山王13-1, 23-1
2. 調査期間：平成3年1月28日～3月6日
3. 調査面積：240m²
4. 担当職員：滝口 卓 石川 俊英 相沢 清利
5. 調査協力者：阿部 三雄、阿部 公雄

（山王遺跡第15次調査）

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市南宮字八幡149-1
2. 調査期間：平成3年7月11日～9月24日
3. 調査面積：205m²
4. 担当職員：石川 俊英
5. 調査協力者：市川 了

（山王遺跡第16次調査）

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字山王三区56-3, 57-2
2. 調査期間：平成3年9月11日～11月21日
3. 調査面積：430m²
4. 担当職員：石川 俊英 相沢 清利
5. 調査協力者：阿部 三郎

※ 調査參加者：鈴木一郎、加藤昭一、松本喜一、小野玉乃、菅野恵子、熊谷好子、後藤みよ子、佐藤さき子、武田りき、平山節子、水越良子、渡辺園恵、渡辺ゆき子、赤間かつ子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、加藤文一、熊谷あつ子、熊谷きみ江、後藤恵子、後藤はつみ、桜井エイ子、佐々木四郎、菅原綱代、千葉亨一、渡辺幹子、芦野しづ子、阿部米子、内海勝子、大友良子、佐藤容子、小笠原マキ子、小野寺恵子、百々みち子、宮川ハルミ

本文目次

I 山王遺跡の立地と歴史的環境.....	相沢.....	1
II 山王遺跡第11次調査.....	石川.....	5
1 調査に至る経緯.....		5
2 調査方法と経過.....		5
3 調査成果.....		8
4 小 結.....		11
III 山王遺跡第15次調査.....	石川.....	15
1 調査に至る経緯.....		15
2 調査方法と経過.....		15
3 調査成果.....		16
4 小 結.....		23
IV 山王遺跡第16次調査.....	相沢.....	29
1 調査に至る経緯.....		29
2 調査方法と経過.....		29
3 調査成果.....		30
4 小 結.....		45
V 山王遺跡第9次調査関連遺構確認調査のまとめ.....	石川・相沢.....	51
VI 西沢遺跡第1次調査.....	相沢.....	53
1 調査に至る経緯.....		53
2 西沢遺跡の立地と歴史的環境.....		55
3 調査方法.....		55
4 調査成果.....		55
5 ま と め.....		61

I 山王遺跡の立地と歴史的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央に位置する仙台市の市街地から、北東約10kmに位置し、南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩釜市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接している。市内の地形は、北東部に利府、塩釜から続く標高20~50mの松島丘陵が、南西部に狭義の仙台平野(沖積地)が広がっている。この丘陵部と沖積地の境には、砂押川が北西から南西へと貢流し、多賀城市的地形を二分している。沖積地の微地形は、海岸部の浜堤、内陸部の自然堤防と低湿地に分けられている。内陸部の新田・山王地区を通る県道泉・塩釜線沿いには、砂押川と旧七北田川の冲積作用によって形成された自然堤防が東西に形成されている。そしてこの自然堤防の周辺および砂押川沿いには低湿地が広がっている。ただし、近年の発掘調査の成果をみると、自然堤防については地質図に記載されているもの(註)よりもかなり広い範囲を占めているようである。

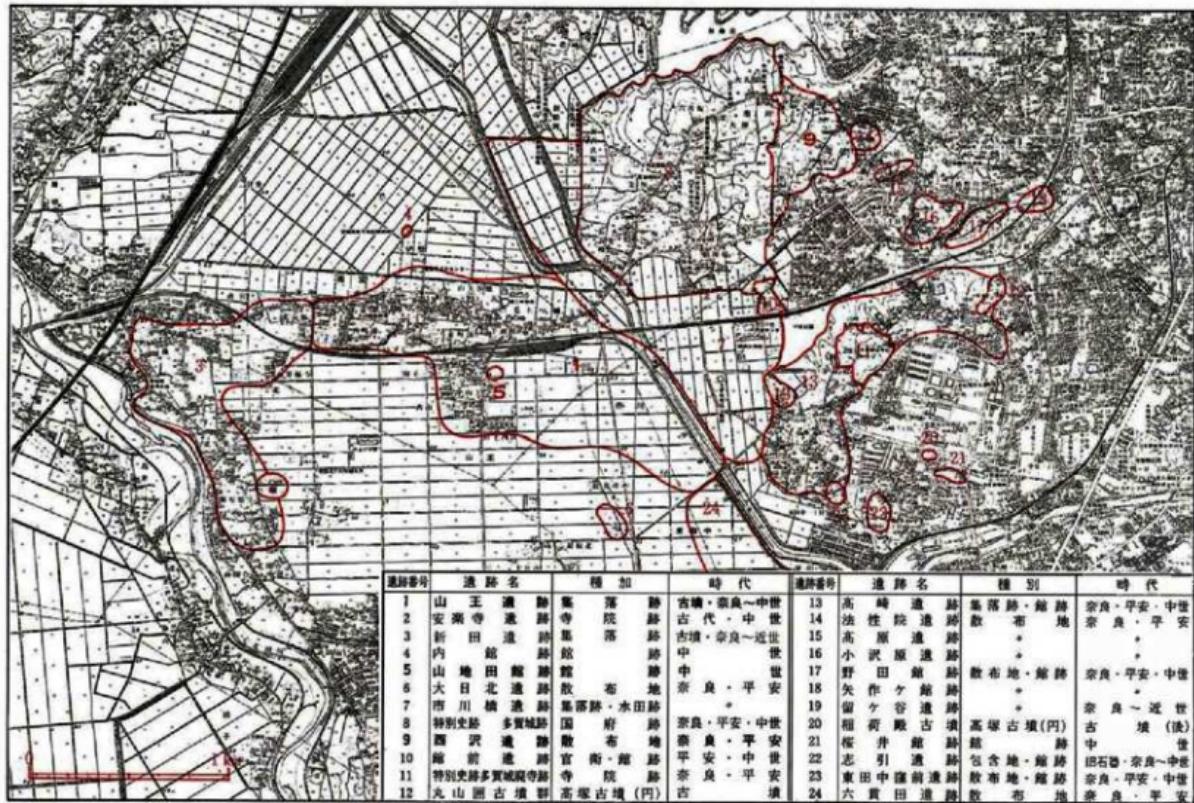
さて、山王遺跡は、前述した自然堤防上に立地し、山王・南宮の両地区を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。遺跡の中央部を東西にJR東北本線が走り、東寄りに陸前山王駅が位置している。そしてこの陸前山王駅の西側に隣接して山王遺跡第9次調査区が位置する。この周辺の地質については、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層の互層から形成される沖積層である。海拔高は約4~5mを計る。

周辺の遺跡についてみると、本遺跡より北東約0.5kmの丘陵上に古代陸奥国府である特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南面一帯には市川橋遺跡があり、山王遺跡、新田遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な集落群を構成している。

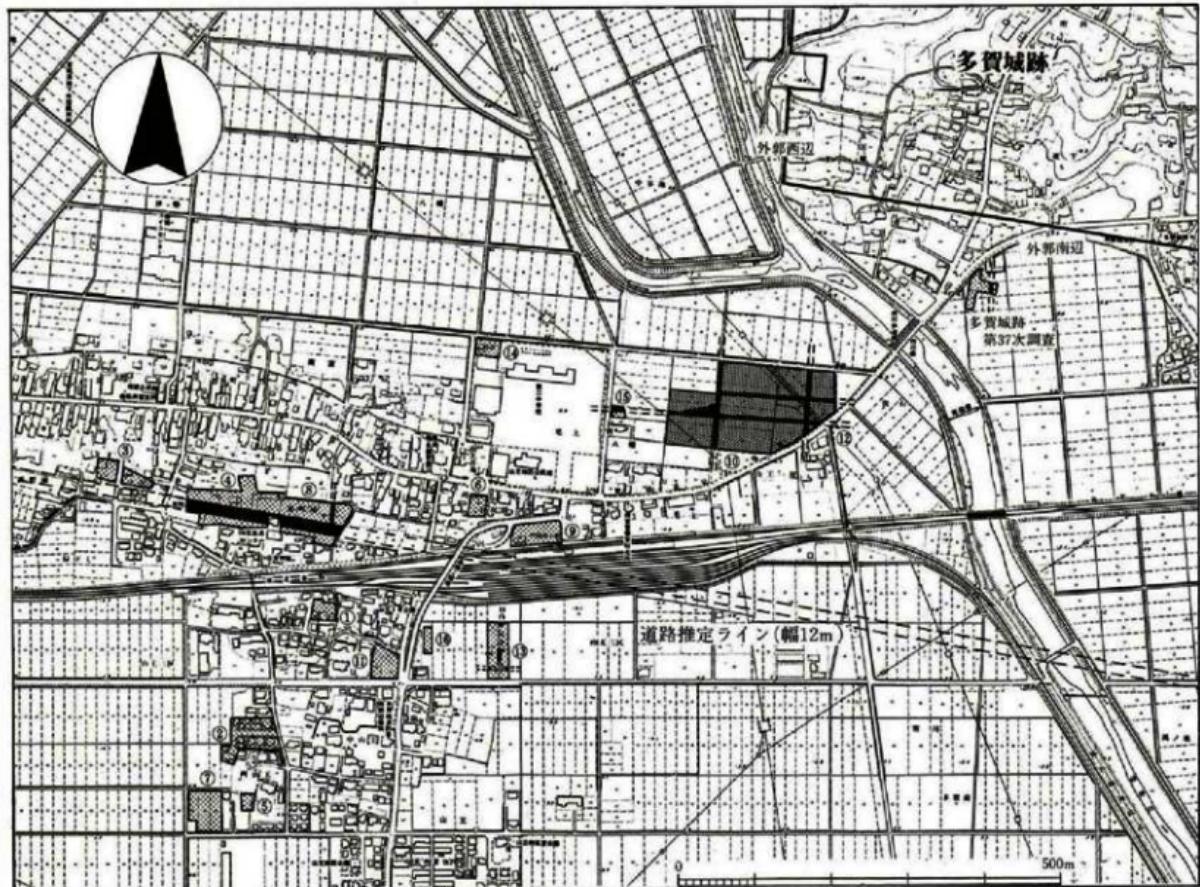
次にこれまでの山王遺跡内における調査成果をまとめてみると、第1次調査(第2図内番号①)では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や溝跡を発見している。出土遺物としては、灰釉陶器や石器がある。

第3次調査(③)では、平安時代の掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1棟、井戸跡1基を発見している。掘立柱建物跡2棟は南側柱列がほぼ揃うので、同時期のものと考えられる。方向はS X 382東西道路の方向(多賀城跡外郭南辺築地の方向)にほぼ沿う。

第4・8次調査(④・⑥)では、平安時代の道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡が検出されている。道路跡は路幅約12mのS X 382東西道路跡を両調査区合わせて約190mにわたって検出しており、これはさらに東西方向に延びるものと思われる(仙塙道路本線敷試掘調査〈多賀前地区〉では、この道路跡の推定ラインにのってくる道路が検出されている)。方向は多賀城跡外郭南辺築地の方向とほぼ一致する。さらに第8次調査区では、東西道路に直交する路幅3.5mを計る南北道路を24mにわたって検出している。道路跡の年代は、灰白色火山灰とのかかわ



第1図 多賀城市遺跡分布図



第2図 調査区位図

※ ①～⑯は当市による調査次数を示している。

りから9世紀～10世紀中頃に位置づけられる。この他に特筆すべきこととして、東西道路に面した土壇から「観音寺」と墨書きされた土器が出土している。この土壇内からは200個体以上の杯がまとめて出土し、内面に油煙状の付着物が認められることから灯明皿として使用されたものとみられ、万燈会などの仏教行事が執り行われたと考えられる。そして「観音寺」は多賀城廃寺の寺名ではないかと推察されている。

第5次調査(⑥)では、平安時代の柱列跡、井戸跡、溝跡を発見した。井戸跡からは曲物や索串などの木製品が出土している。

第6次調査区(⑥)は第9次調査区の西方約50mと最も近接した場所に位置する。ここでは東西5間、南北2間の大規模な建物跡を検出している。方向はS×382東西道路の方向にほぼ一致する。また、井戸跡も底に曲物を据えた立派なものである。造構の性格としては、多賀城に係る官人の居宅と考えられている。

第7次調査(⑦)では、平安時代の烟跡、溝跡を発見した。

第9次調査(⑨)では国守の館と推定される東西9間以上、南北4間の四面暗付建物跡と、それに付属する建物跡・井戸跡を発見した。年代は10世紀前半と考えられる。出土遺物の中で特筆されるのは、多量の灰釉・綠釉陶器、中国産陶磁器、そして木簡(題簽軸)である。木簡の内容は陸奥国と右大臣との間にやりとりがあったことを示すもので、「国守の館」とする裏付け資料となっている。

仙塩道路関連調査(⑩・⑪)は平成元年より3か年継続して実施してきている。多賀城跡政府中軸線とほぼ方向が一致する南北道路およびそれに直交する東西道路が検出されている。この調査結果により多賀城跡南面に1町を単位とする計画的な地割りがなされていたことが明らかになった。

〈註〉

『広瀬川流域の地形地質調査報告書』地学団体仙台支部・仙台市科学館(1986)

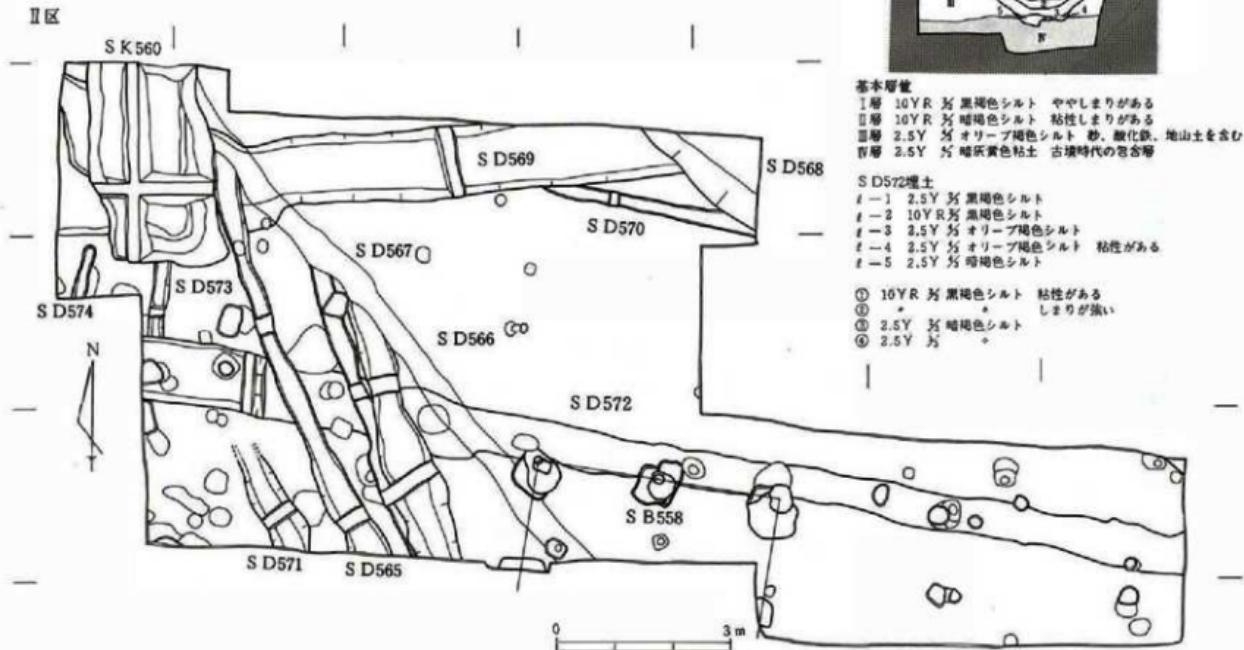
Ⅱ 山王遺跡第11次調査

1 調査に至る経緯

本調査については、山王遺跡第9次調査の関連調査として実施したものである。第9次調査は平成2年度に実施されたもので、調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡十数棟が重複して発見され、大木を半分に割って剝りぬいた井戸跡も見つかっている。掘立柱建物跡の中には大規模な四面廻付建物跡もあり、その柱穴の埋土から「右大臣殿・錢馬收文」と墨書きされた木簡が発見されている。これらの遺構に伴なって、古代の土器類が多量に見つかっており、この中には灰陶、綠釉陶器にまじって中国産の青磁、白磁もまとまって出土した。このような成果より大規模な四面廻付建物跡や井戸跡は「国守の館」の主要な一部分を構成するものと推定されるに至った。全国的に見て初めての発見である「国守の館」の遺構の広がりを把握するため、国及び県の指導を受け、遺構の範囲確認調査として実施した。

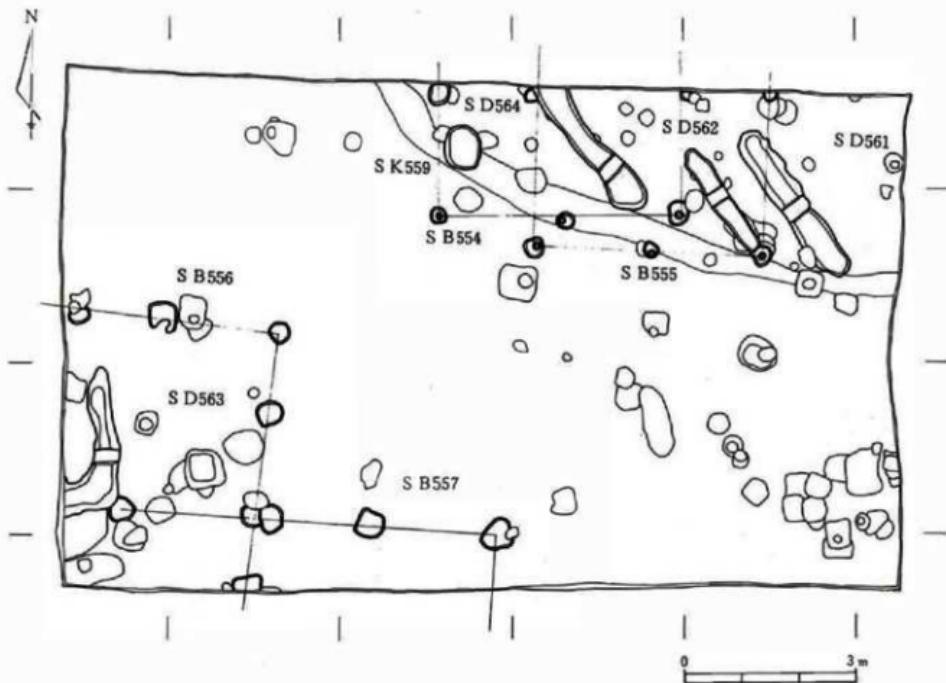
2 調査方法と経過

調査は平成3年1月25日調査区の設定から開始する。調査区の制約上、便宜上Ⅰ区とⅡ区に分ける。28日重機を導入して表土剥離を行う。調査区内はほぼ全城に削平が及び、その上に厚さ約1m程の盛土が堆積している状況が観察された。30日より作業員を動員し遺構検出作業に入る。両調査区からは溝跡、土塙、柱穴等を多数検出した。この中でもⅡ区南側で見つかった柱穴2箇分は径0.7~0.9m程の比較的規模の大きなものであった。このため柱穴の広がりを把握するために東側に拡張を行った。尚調査の性格上、遺構は確認のみにとどめて調査を進めることにした。Ⅰ区では検出した遺構には建物跡が数棟見つかった。また埋土中に灰白色火山灰を含むものも発見され、ある程度遺構の年代を知る手掛りとなった。2月7日より平面図及びセクション図作成、写真撮影を行い、15日にはこれらの調査が終了した。16日には県文化財保護課の視察があった。調査が終了したⅠ区については18日埋め戻しを行った。一方Ⅱ区は溝土塙、柱穴が重複した状況で検出された。拡張部分については確認当初の2箇分のみの検出に終わり、大部分が南側に延びが及んでいることが判明した。この柱穴については2時期の重複があり、抜き取り穴も伴うことも判明した。この他の遺構についても年代等を知る手掛りを得るために掘り込みを行った。この他調査区内の土層堆積状況を観察するため一部深掘りも実施した。その結果、古墳時代の所産と考えられる遺物を含んだ包含層を確認した。3月6日には平面図作成等を終了し全景撮影を行い全ての調査を完了した。



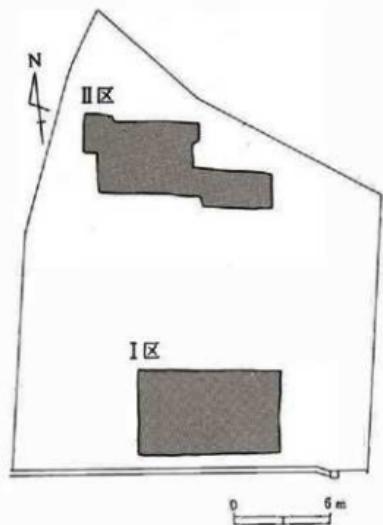
第1図 検出透構全体図 II区

I区



第2図 検出遺構全体図 I区

3 調査成果



第3図 調査区位置図

S B555： S B554 とほぼ隣接する地山上で検出した東西 2 間、南北 1 間以上の掘立柱建物跡である。S B554・S D561、562、564 と重複し S D562、564 より古い。S B554・S D561 とは直接切り合いがなく新旧関係については不明である。柱間は南側柱列西より 2.13m + 2.07m で総長 4.19m を計る。東側及び西側柱間は一部柱痕跡を確認していないため柱穴をその中心に想定すると、東側柱列南より約 2.05m、西側柱列南より約 2.07m まで検出した。柱穴は方形もしくは楕円形を呈し、規模は 0.25~0.39m を計る。埋土は黒褐色シルトである。柱は確認された柱痕跡より径 0.1 ~ 0.15m の円形である。

S B556： 調査区 I 区南西部の地山上で検出した南北 3 間以上、東西 2 間以上の掘立柱建物跡である。S B557 と重複しこれより古い。柱間は柱痕跡を検出していないため柱穴をその中心に想定すると、東側柱列北より約 1.47 + 約 1.49m + 約 1.53m で総長約 4.49m まで検出した。北側柱列は東より約 1.98m + 1.62m で総長約 3.59m まで検出した。柱穴は遺存状況が悪く明確にプランが検出出来ないものもあったが、方形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。規模は遺存状況の比較的良好なものについて見ると約 0.5 m 程である。埋土は地山土に黒褐色シリトブロックを含んでいる。

1. 検出遺構

(1) 掘立柱建物跡

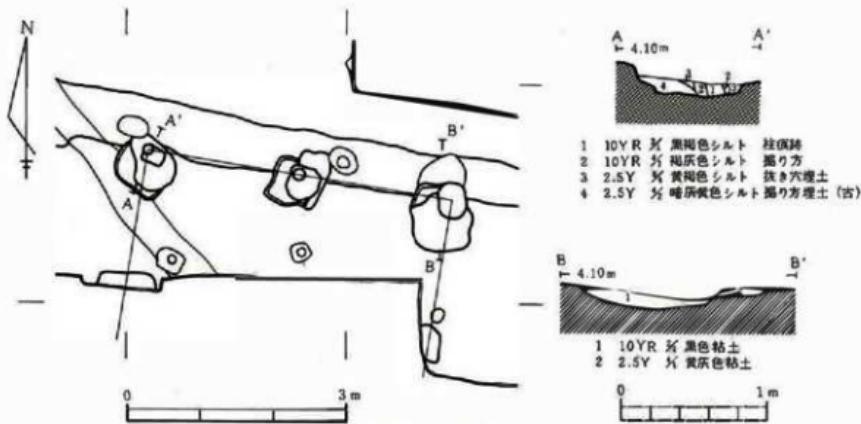
S B554： 調査区 I 区北側の地山上で検出した東西 2 間、南北 1 間以上の掘立柱建物跡である。S B555・S K559・S D564 と重複しているが、これらとは直接切り合いがなく新旧関係については不明である。柱間は南側柱列西より 2.01m + 1.94m で総長 3.94m を計る。東側及び西側柱間は一部柱痕跡を確認していないため柱穴をその中心に想定すると、東側柱列南より約 2.97m、西側柱列南より約 2.59m まで検出した。柱穴は方形もしくは楕円形を呈し、規模は 0.18~0.44m を計る。埋土は灰オリーブシルトである。柱は確認された柱痕跡より径 0.1 ~ 0.15m の円形を呈する。

S B557：S B556と同様、調査区南西部の地山上で東西に並ぶ3間分の柱穴を確認している。東側の柱穴の延びについては、東側及び北側に柱穴が検出されないことから南側に延びが及んでいるものと考えられる。柱穴西側はS D563及び柱穴によって失われ、また南側についても調査区外となるために不明である。そのため建物跡の規模は東西3間もしくはそれ以上南北1間以上分しか判明できなかった。S B556と重複し、これより新しい。柱間は柱痕跡を検出してないため柱穴をその中心に想定すると、北側柱列東より約1.94m+約1.72m+約2.26mで総長約5.92mまで検出した。柱穴は方形もしくは梢円形を呈している。規模は0.45~0.55mである。埋土はS B556と同一である。

S B558：調査区II区南側の地山上で検出した東西2間、南北1間以上の掘立柱建物跡である。本建物は大きく削られている。SD 572と重複し、これより古い。建物跡はほぼ同位置で2時期の重複を確認した。以下古い順に概要を記する。

S B 558 (A) 比較的良好な北側柱列中央を参考にすると、柱穴は長方形を呈し、規模は長辺0.7m、短辺0.65m前後を計る。埋土は暗灰黄色シルトで、黒色土を含んでいる。柱穴には抜き取り穴が認められ、柱位置は不明となっている。抜き取り穴は不整形を呈し、埋土は黄褐色シルトに黒色ブロックを含むものである。

S B 558 (B) A期の柱穴を抜き取った後、ほぼ同位置で建て替えたものである。柱穴の残存状況は悪くわずかに埋土が残っている状態であった。このため柱穴のプラン、規模等は不明となっているが柱穴2間分の内、1間分については柱痕跡を確認することができた。柱間は北側柱列東より2.12m+2.15mで総長約4.27mを計る。埋土は粘質のある黒色土で地山ブロックを含んでいる。柱は確認された柱痕跡より径0.15m前後の円形を呈している。



第4図 S B558実測図

遺構名	検出面	重複関係	方 向	長さ×幅×深さ(単)	遺 物	埋 土 の 特 徴・備 考
S D561	I 区 地 山	S B555 (新旧は不明)	N W S.E.	2.98×0.53×0.06	土師器杯・高台杯・甕、須恵器甕	黒褐色シルト單一層
S D562	I 区 地 山	S B555 → S D562	N W S.E.	2.08×0.26×0.04	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼土器杯	*
S D563	I 区 地 山	S B557 → S D563	S N E.W.	— ×0.47×0.3	土師器杯・甕、須恵器杯・赤焼土器杯、平瓦	埋土中に灰白色六山瓦を含む
S D564	I 区 地 山	S B555 → S D564 S B554 (新旧は不明)	N W S.E.	2.65×0.45×0.04	な し	オリーブ褐色シルト
S D565	II 区 地 山	S D569 → S D665 S D572 S K560	N W S.E.	7.2×0.57×0.1	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	暗褐色シルト
S D566	II 区 地 山	S D567 → S D566	N W S.E.	4.4×0.87×—	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、壺、平瓦	黒褐色シルト
S D567	II 区 地 山	S D572 → S D567 → S D566	N W S.E.	5.2×— ×—	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、壺	黒褐色シルト單一層
S D568	II 区 地 山	S D569 → S D568	N W S.E.	不 明	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	
S D569	II 区 地 山	S D570 → S D569 → S D568	E W	10.2×0.98×—	土師器杯・甕、瓶、須恵器杯・甕	下層は自然堆積、上層は人為的埋め戻し
S D570	II 区 地 山	S D570 → S D569	E W	3.2×0.26×0.05	な し	黄色シルト
S D571	II 区 地 山	ナ シ	N W S.E.	1.8×0.61×0.09	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	黒褐色シルト
S D572	II 区 地 山	S D573 → S D572 S D565-566-567	E W	18.3×0.84×0.28	土師器杯・甕	黒褐色シルト、オリーブ褐色シルトに大別
S D573	II 区 地 山	S D573 → S K560 S D572	N S	1.3×0.27×0.08	土師器杯・甕	黒褐色シルト單一層
S D574	II 区 地 山	ナ シ	N S	0.95×0.22×0.1	土師器杯・甕、須恵器杯	*
遺構名	検出面	重複関係	平面形	長軸×短軸×深さ(単)	遺 物	埋 土 の 特 徴・備 考
S K559	I 区 地 山	S B554 (新旧は不明)	方 形	0.75×0.65×0.16	な し	
S K560	II 区 地 山	S D573 → SK560 S D569 → S D555	長方形	3.48×2.12×1.3	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、壺、長颈甕、瓶 丸瓦、平瓦、砾石	下層は自然堆積 上層は人為的埋め戻し

第1表 溝跡・土塙概要

